

発信番号：DNSC - 0915

発信日：2007年6月13日

原稿枚数：3

会員各位

**ご家族の方にもお知らせ下さい**

発信：大連日本商工会  
医療委員長 増井 正弘

## 日本人医療相談室からのお知らせ

日本人医療相談室・星野医師より「B型・C型肝炎の予防について - 」に関するニュースレター(2007-3)が送付されましたのでお知らせいたします。

記

ニュースレター(2007-3)

以上

### B型・C型肝炎の予防について -

大連市中心医院日本人医療相談室 星野眞二郎

ウイルス性肝炎の代表的なものとしてA型、B型、C型、E型があります(これ以外にも肝炎ウイルスは有りますが稀です)。少し以前の統計になりますが、2006年11月における中国国内における発生数(当地衛生部発表)は、各々6,237名、108,022名、7,122名、1,218名だったそうです(ちなみに国立感染症研究所感染情報センターの報告によると、2006年の本邦における発生数はA型肝炎316名、B・C型肝炎275名、E型肝炎70名でした)。これらの肝炎ウイルスの感染経路としては以下の2通りが知られています。

海産物や水を介した“経口感染”(A型、E型)

“血液や体液を介した感染”(B型、C型)

A型肝炎については、発症しても通常は1～2週間で治癒し、ワクチンにてある程度予防が可能です。しかし、血液や体液を介して感染するB・C型肝炎については、一部が“劇症肝炎(致命的)”、“慢性肝炎”、“肝硬変”、“肝癌”へ移行するため、注意が必要です。“慢性化、肝硬変、肝癌に移行する割合”はC型の方が高いのですが、“感染力”からすると、B型肝炎の方がはるかに強いと考えられています(ただし、C型肝炎に対するワクチンは有りません)。特に、B型肝炎ウイルスのe抗原(HbsAg)が陽性である人(ウイルスの活動性が非常に強い)の血液による感染は最も注意しなければならない感染症です。

B型肝炎ウイルスを他人に感染させる可能性のある“キャリアー(ウイルス保有者)”の比率は、欧米諸国では全人口の約1%以下(0.1-0.5%)と少ないのですが、日本では1~2%、東欧や中東、ロシアでは2~7%、中国では10%前後と考えられています。

次に“血液や体液を介して感染する”B型・C型肝炎の感染経路予防について述べたいと思います。

輸血および血液製剤（血友病の際の止血剤など）使用

ウイルスを含む血液で汚染された器具による外傷（例えば、注射器やメスなどによる医療行為、不衛生な理髪店での顔剃り、鍼灸治療、刺青・ピアス穴あけ、覚醒剤の回し打ちなど）

母子感染（産道感染、垂直感染とも呼ばれています）

性行為（特に男性同性間の場合）などが挙げられます。

次に上記感染経路別に、B型・C型肝炎の予防法について述べます。

現在、輸血用血液や血液製剤については血液を介する各種感染症の発生を予防するために、事前に感染症の有無を調べたものを使用することになっているため、発生数は急速に減少しています。しかし、献血者の血液が検査時には抗体が陰性で、“感染直後のために、検査が陽性にならない時期＝ウィンドウ・ピリオド”である可能性は否定出来ません。従って、これらの治療を受けた場合には、後日改めて、肝機能検査（必要な場合には肝炎ウイルス検査も）を受ける必要があります。

“B型・C型肝炎患者の血液や体液で汚染された治療器具”があるとします。これを安全な状態で治療に用いるためには、“使い捨て”にするのが一番良い方法ですが、高価な器具の場合にはそうもいきません。“使い捨て”に出来ないものに関しては、“B型肝炎ウイルスを含む全ての微生物を死滅させてしまう方法”で処理する必要があります（この一連の操作を“滅菌”と言います）。しかし、現実的には、全ての患者様にウイルス検査を行うことは不可能であるため、“スタンダード・プレコーション＝標準的予防対策”、つまり、“全ての患者を感染症扱いで予防対策を講ずること”が重要になります。

本邦においては1985年より、母子感染防止のために、母親がB型肝炎である場合に、出産時に子どもに感染する（産道感染）のを予防するために、出生直後にB型肝炎の抗体を含む“免疫グロブリン製剤”という注射に加えて“B型肝炎ワクチン”を3回接種することになっています。一方、B型肝炎患者の多い中国においては、現在では、“出生直後のB型肝炎ワクチンの予防接種”を原則として、全員が受けることになっています。

不特定多数との性行為異性間あるいは同性間（特に男性同士の場合）にて感染するのを予防するために、一番簡単な方法は“そのような行為を慎む”、“適切な避妊用具使用を使用すること”が挙げられます。もし、事前に相手がB型肝炎キャリアーであることが分かっている場合には、パートナーが肝炎ワクチンを接種することである程度予防可能です（ただし、予防接種にて100%抗体がつくわけでは有りません。また、接種後、年数が経つと発症を阻止出来るレベルの抗体価を維持出来なくなる場合も有ります）。

しかし、1回の性行為にて必ず感染するわけでは有りません。また、一般にC型肝炎と比べて）B型肝炎の方が性行為により感染する確率が高いことが知られています。

以上

2007年 5月分

## 1. 邦人一般診療・健康診断受診者数

	一般診療			健康診断			受診者 合計
	成人	小児	計	成人	小児	計	
男	118	16	134	0	0	0	134
女	52	14	66	0	0	0	66
計	170	30	200	0	0	0	200
初診	135	29	164				
再診	35	1	36				

▼(逐月追記)

## 2. 総受診者の歴月推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2005	159	120	176	156	220	202	163	202	233	168	159	188	2,146
2006	220	226	221	209	210	229	225	230	234	259	150	252	2,665
2007	213	200											413

## 3. コメント

## 食の安全について -

最近、マスコミを騒がせている問題の一つに、“食の安全”があります。中国のある地方において、バナナの病気の一つである“パナマ病”が大流行して、短期間に大量のバナナが枯れる現象が発生したそうです。この病気は“バナナの癌”あるいは“バナナ SARS”などというネーミングでマスコミに興味本位に取り上げられた結果、“バナナを食べると癌になる”、“バナナを食べて SARS に罹った”、拳句の果てには“この病気により、すでに多くの死者が出た”などの噂が流れたようです。農業部当局はこれらの噂を否定し、“バナナの病気がヒトに感染することは有り得ない”としています。

一方、“パナマ”においては“咳止めシロップ”の服用者に多数の死者が発生、また、“練り歯磨き”に本来使用されるべきでない“ジエチレン・グリコール”が含まれていた事件が発生しました。いずれの場合にも、製造過程で“問題となる物質”がどのようにして混入したかが焦点となっており、現在、原因の究明がなされています。

最近、米国テキサス大学の研究グループが、“喘息発作や花粉症などのアレルギー疾患”が近年増加している原因の一つとして、殺虫剤に使われることもある DDT や PCB などの有害化学物質が、“内分泌攪乱物質（環境ホルモン）”として作用していることを報告しています。我々の生活を見回すと、この他にも、野菜栽培に使用される合成肥料や残留農薬、家畜類・養殖魚等を使用される抗生物質の残留、防腐剤・合成色素などの食品添加物、（医薬品成分が含まれた）健康食品・サプリメント以外にも、“抗菌グッズ”に含まれる抗生物質、建築建材に含まれるホルムアルデヒドなど“様々な化学物質”が氾濫しており、これらの化学物質が本当に我々の健康に悪影響を及ぼすことがないか、改めて見直す必要があると思われます。

以上